

人生の転機は  
誰にでも訪れる  
常に心にアンテナを！

## Role Model 06

## 首藤 剛

大学院生命科学研究部准教授

薬学部 → 大学院（修士課程） → 留学（在学中） → 大学教員（博士号を取得）

**Profile** しゅとう・つよし 大分県出身。1995年薬剤師を目指して熊本薬学部に入學。1999年大学院博士前期（修士）課程在籍中に、人生を左右する異例の海外留学を経験。帰国後、熊本大学で助手に着任し、薬学博士号を取得。現在、薬学・創薬研究に従事しつつ、免疫学や薬学英語などの大学講義や熊本公開講座「薬を知ろう！」シリーズの実施など、幅広く活動を展開している。



## 人生に訪れた3つのターニングポイント

高校時代の私は、漠然と「医療」「ゲノム（遺伝子）」「難病」といったキーワードに興味を持ち、将来はこれらのいずれかに関われば良いと感じていました。そんな時、当時熊本大学薬学部の小田切優樹教授（現・崇城大学薬学部教授）と出会いました。小田切教授から「熊本薬学部はこれからの日本や世界の薬学を担う優秀な先生を集めている」と伺い、即座に熊大を目指すことに。次のターニングポイントは大学在籍中、本学の甲斐広文教授との出会いです。甲斐教授の「薬学研究者は、世界の医療を変える力がある」という言葉に影響され、大学院進学・研究者人生のきっかけを得ました。その大学院修士課程の途中で「アメリカで研究してみないか」という甲斐先生の誘いを受けました。これが第3のターニングポイントとなり、自分の将来を考えるきっかけとなりました。人生を左右する恩師との出会い、海外留学を見逃さなかった決断力、海外で培った語学力および研究力は、大きな自信となり、現在のアイデンティティの確立や思考回路の形成に大きな影響を与えたと思います。

## 自分のため、家族のため、世界のために

現在は、アンメットメディカルニーズ\*の高い遺伝性疾患に対する治療薬（法）の開発を目指した研究を行っています。最終的にはその成果をもとに、症状が類似した患者数が多い慢性疾患の治療薬の開発への糸口を探索したいと考えています。私の研究でいうと、嚢胞性線維症（CF）という遺伝性の難治性肺疾患を研究し、世界の死亡順位が高い慢性閉塞性肺疾患（COPD）の治療薬開発へとつなげていこうとする取り組みがこれにあたります。また、最近では、このような疾患治療薬開発のために、伝承医療用途があり安全性が高い天然素材の活用を考慮した地球規模で取り組む研究「有用植物×創薬システムインテグレーション拠点推進事業（UpRod）」にも邁進しています。

私にとって、もう一つかけがえのないものは、家族や周囲の存在です。妻も大学教員ですが、「結婚、出産、育児を理由に自分のアイデンティティを失いたくない」というモチベーションで、毎日、研究・教育・家事に頑張っています。私自身も子育てや家事から学ぶことも多く「夫婦とも全てにおいて完璧である必要はなく、相互が

得意な部分で埋め合わせれば難しいことも達成できる」という発想で、家庭と仕事の両立を目指しています。

## 学力・体力・精神力を養い、よりよい“人財”へ

若い学生には、以下のことを期待したいです。“今”があるのは、先人たちが築いた叡智の結集によることに感謝し、次世代に、より良い環境を提供するために、現代の人々が努力しなければならないことに気付くこと。そうすれば、どのような困難に直面しても、自分自身がプレずに乗り越えて行くことができます。また日常生活では、物事を正しく考える脳を養うという目的で、基礎学力や語学を身につける意味を理解し、邁進してほしいと思います。さらに、自らのモチベーションの維持、生き甲斐を確立し、安定感のある人物になるためのセルフマネジメント力を養ってほしいと思います。人生に適度な負荷は必要。「自分はどこまでできてどこからは無理なのか」を冷静に判断し、できないことをどのように埋め合わせて行くのかという視点で物事を考えていければ、皆さんの人生は豊かになるのではないのでしょうか。ぜひ、それぞれの人生のステージに応じた自分なりの生き方で、現代社会に貢献できる“人財”になってください。



研究室の学生たちと

\*アンメットメディカルニーズ：いまだ有効な治療法がない疾患に対する医療ニーズ

## 座右の名は？

『人生には何ひとつ無駄なものはない』  
いろいろと好きな言葉はありますが、この言葉に私の思いの全てが含まれています。

子どもの遊び、ジムでの運動（週1）で汗を流す！